原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第百七十五号

原告団レポート

遺族――

中西 和子さん

生活保護頼って生きる

たとえ一時期だったとはいえ、忘られぬ思い出

老眼鏡でがんばる仕事

身うちの者が帰つてしまうと、子どもたちと残されてしまい、途方に暮れた。明日からどう暮らしていけばよいのか。

三池の遺族の一人――中西和子さんは、荒尾市大島下区一〇八七番地に住んでいる。

夫の巽さんをあの三川鉱炭じん大爆発でうしなってから、すでに十七年を過ぎた。

大爆発は四百五十八人もの死者と八百三十九人にものぼる一酸化炭素中毒患者（俗にCO患者という）をつくり出し、世の人びとを驚愕させたものだったが、その前後の事情から推して、あれはたれもが見るように、たしかに資本による労働者の大虐殺だった。

彼女は、昭和五年二月十六日の生まれ。思いも寄らぬ不幸に見舞われたあのとき、まだ三十三歳という若さだったのに、今は早や五十歳。その後の苦労がたたってか、トシよりもはるかにふけて見えるところが、その後積み重ねてきた歳月の重さを物語っている。

子ども五人

彼女が、夫巽さんとの間に恵まれた子どもは五人。

長男が信一さんで三十一歳（昭和二十四年七月十二日生まれ）。福岡大学の薬学部卒業後、こんどは九州大学の大学院で製薬化学を学び、卒業後は某調剤センターに母親のもとから通勤。

長女は裕子さん。二十六歳（同二十九年一月十九日生まれ）。幼いころ襲われた熱性リューマチのため、不幸にも身体障害者となってしまい、いまは施設に。

次男の弘志さんは二十四歳（三十一年一月一日生まれ）。高校卒業後、近くの長洲町（熊本県下）に操業する不二ザッシに、家から通勤。

次女の桂子さん。二十三歳（三十二年十一月六日生まれ）。看護婦で、北九州市に近い津屋崎の一病院に勤務。もちろん寮住まい。

末っ子は三女の久美子さん。二十二歳（三十三年一月二十六日生まれ）。高校卒業後ひき続き経理専門学校に学び、珠算一級、簿記二級、タイプ三級、医療事務士などの資格を取ってきた。今は母親和子さんのもとで、家庭内職。

以上に見るように、不幸な長女の裕子さんをのぞくほか、彼女の四人の子どもはそろって社会に出それぞれの道を歩いている。彼女の肩の荷もそれだけ軽くなったものの、だが、大黒柱の巽さんの命をもぎとられたとき、長男信一さんが中学二年生、長女裕子さんが小学四年、次男弘志さんが小学二年、次女桂子さんと三女久美子さんにいたってはまだ保育園に通う幼な子だった。そのうえに、長女の裕子さんが身体障害児だったのだから、重い荷物がいっぺんに彼女ひとりの肩におぶさってきたのである。その後の歩みが果たしてどんなに残酷なものだったか、想像できるはずである。

結婚と闘い

中西さんが、当時港務所の万田駅（今はない）で操車手として働いていた巽さんと結ばれたのは昭和二十三年の七月。彼が二十一歳（昭和二年九月十日生まれ）で、彼女が、なんとまだ十八歳という乙女のときのことだった。

ともあれ結婚後七年め――昭和三十年に中西さん一家は、荒尾市の緑ケ丘社宅へ。初め黛町に、あと楓町に移るが、一家はここで三池炭鉱労働者へときたえあげられてゆく。

この大黒柱

彼が、港務所の操車手から三川鉱の採炭工に変わり、その坑内で働くようになるのはその後のことだが、そんな巽さんはまた一面豊かな才能を恵まれて、書に秀でた人でもあった。つとに書道教師の資格を得ていたばかりでなく、大爆発が起きる年の――昭和三十八年三月一日、西日本書道学会の原田観峰会長から〝啓峰〟という雅号を受けている。

近くの闘争本部ほか数カ所に書道塾を開き、いずこでも頼ってくる多くの子どもたちに手ほどきするためにかけずり回った。

もともと高等小学校に学ぶころから優れた成績をつらねてきたが、その最終学年の高等科二年卒業のときの成績（通信簿）はといえば修身、読方、綴方、国史、算数、それにいうまでもなく習字などことごとく優、良はといえば理科に農業くらいである。

子ども思いでもあった。幼かった下の二人の子どもを、自転車の前後ろに乗せてはそこかしこへペダルを踏むのが常だったという。

子どもたちばかりでなく、妻の和子さんまでがよく病気しては、かわるがわる入院したものだが、そんなときでも笑顔を忘れず、心を砕いてくれた巽さんの人柄も、とうてい忘れられない。

まさしく一家の大黒柱だった巽さんだった。そんな人の命をいきなり大爆発で奪われたのだから、打撃がどれほど大きいものだったか、述べるまでもなかろう。

桜色の顔が

巽さんが冷い遺体になり変わって彼女のもとへ帰ってきたのは、もう、大爆発の日の翌る日――十日の午後だった。事実を告げられて腰が抜けてしまい、立てなくなった体を、身うちの者に両脇からささえられながら、ある一つの柩の前までつれてゆかれ、変わり果てた夫に対面。完全に魂の抜け殻と化してしまった体だったのに、まるで紅をさしたように桜色をして美しかった巽さんのそのときの顔だけが、今も記憶のなかにあざやかに刻まれている。

だれからか、「あんたがしっかりせんでどうするか。だれが、この子どもたちを育てるか」、と一喝食わされ、「ハッ」と我をとりもどしてみると、そこには、たしかにまだまだ幼い五人の子どもたちのかわいい顔が並んでいたではないか。

眼鏡も五つ

翌――昭和三十九年の春から、ことあるごとに思い出されるのが、三池闘争のときのこと。夫の巽さんがストライキを守るためのピケに立てば、妻の彼女は幼い子どもをオンブしたり、モミジのような手をひきながらデモに参加したり。とくに巽さんは久保清さんが、会社側の暴漢のあいくちで心臓部深く突き刺されて散ったときたまたま四山鉱正門を固めていた同じピケの隊列のなかにあった。長い棒や木太刀などをふり回しながら、ピケ隊に向かって襲いかかってくる暴力団の一団と、あくまで退ぞかずわたり合った体験さえもっていた。

巽さんは五人きょうだいの真んなかの子。長兄も、彼と同じように三池炭鉱に働いていた。それも職制の位置にあったからたまらない。三池闘争は、この二人のきょうだいのなかを真二つにひき裂いてしまう。巽さんが頑として三池労組の旗をふりかざせば、長兄は長兄でその立場上会社側につかざるを得ず、敵味方に分かれて直接相対峙することさえあった。

長兄が弟に向かい、「たとえ三池労組員とはいっても、ひっこんでいてくれたらいいのに……」といまいましがれば、弟は弟で長兄に言葉を返した――「おまえが、先に出てきたりせんとよかっじゃん」。

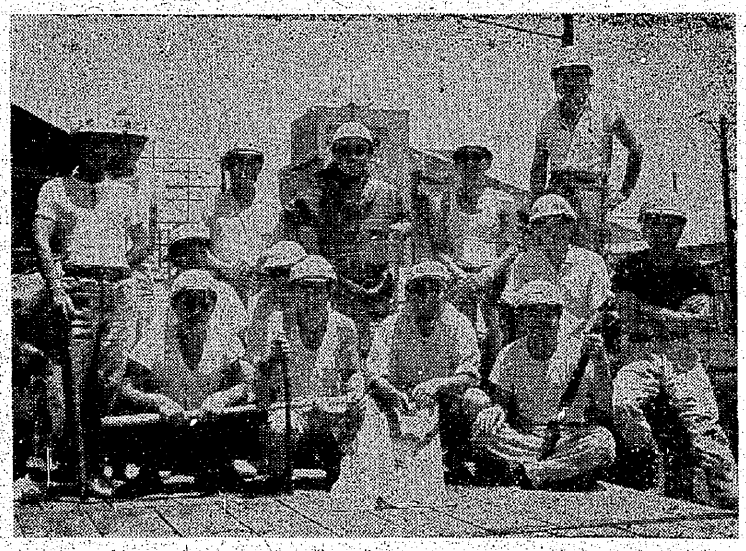
同じ悲しみに打ちひしがれた遺族仲間とともに、「遺族の生活対策の一助として」とのふれこみで、荒尾市原万田妙見に誘致されたアソニットへ。

彼女が受けもたされた仕事はリンキングだった。同じリンキングでも、袖つけ、ポケットつけ、襟つけなどの仕事に分かれていて、彼女はもっぱら襟つけで通してきたが、すでにニットの製品となって送られてくる身ごろに、小さな編み目を二つ、三つ、三つと数えながら襟を縫いつける作業だ。目拾いを一つ落とすと、次の補習係の仲間からいやな顔をされるのでいきおいその作業は一日じゅうが緊張のし通し。

視力が当然、摩滅する。現に中西さんがいまかけている眼鏡は早くも五つめだ。

そうしてがんばってきたが、そのため体そのものがすっかりまいってしまい、一時期など途方にくれては苦い思いをこらえにこらえ生活保護にすがったことさえある。そのためには、会社の事務所や市役所の係へ重い足を運ばないではすまない。ゆけば、白い目で見られるばかりでなく、「あんたげん子どもばどげんしよっとかん」などと嫌味まで聞かされなければならなかった。「何が苦しいといって、生活保護に頼りながら生きていたときの苦しさは忘れられません」と彼女。その言葉の裏から悲しい思いが響いてくる。

いったいだれが、彼女にこんなにも苦しい思いを強いたのか。



三池闘争のときの巽さん。（前列向つて左から二人目の人＝しやがんでいる）

おわび

▼…本紙前号のこのページで、一つの重大な誤りをおかしてしまいました。このページに使う写真が、大牟田労災入院患者の姿だったはずが、熊大入院中の受川孝さん（植物人間）になってしまいましたので、説明と写真がちぐはぐになりました。業務の繁忙からとはいえ、申しわけありませんでした。心からおわびいたします。

――編集部